



こどもから大人まで、沖縄県の医療に貢献する、より良い病院を創って行きたいと思っています。



沖縄県立南部医療センター・こども医療センター 院長  
**我那覇 仁 先生**

Q1. 県立南部医療センター・こども医療センター院長就任、誠におめでとうございます。就任されて約6カ月が過ぎましたが、ご感想と今後の抱負をお聞かせいただけますでしょうか。

今年4月、県立南部医療センター・こども医療センターの4代目の病院長を拝命し、早くも半年が経過しました。私はこれまでの35年間、殆どを臨床医として過ごしてきましたが、院長就任後今までと全く異なった経験をする事になりました。改めて人と人が実際に対話する事が大切な事、常に相手の立場に立って物考える事がいかに重要であるかを痛感しています。人口約70万人の、南部医療圏の医療を担う基幹病院として、今後の役割や抱負について述べたいと思います。

1. 初めに、南部医療圏において、こどもから大人までの総合医療センターとして、私達が掲げた理念と基本方針を遵守し、高度多機能な、地域に開かれた頼れる病院、信頼される病院を目指します。
2. 南部医療圏における救命救急センターの役割を維持します。救急医療は医療の原点です。当院は卒後臨床研修施設として、全国から多くの若い研修医が common disease, primary care を学ぶために当院を志望します。この役割を果たす為にも、2次～3次

救急医療を中心に行いますが、1次救急患者の受診を拒否するべきではないと考えます。しかし今年初め、救急室専従医が大幅に減少し、特に内科部門において準夜、深夜の過重負担があります。救急医の確保は急務ですが、他医療機関との連携やシステムの構築も必要となります。内科系や外科系の成人部門を如何にして層を厚くし、強化する事ができるか、今後の課題です。

3. 県が政策医療として求めていた、身体合併症を持つ精神疾患病棟は長い間休床が続いていましたが、今年10月、ついに14床が開床しました。全国でも少ないリエゾン型の精神疾患治療施設として、医療関係者や県民から期待されています。
4. 小児部門は、これまで慢性的に病床が足りず、専門的な治療の延期を余儀なくされる事や、救急室から年間800人もの小児が、他院に紹介されていました。今回病棟を再編し、小児20床を新たに確保する事により、より良い小児医療を提供する事ができると思います。
5. 教育、研修を大事にします。卒後臨床研修に関しては当院の大きな軸であり、今後とも研修医を確保していく事は病院の将来像に大きく影響します。研修医にとって魅力のある研修病院とは何なのか、研修終了後

のアウトカムをどのように設定するかが各科に求められ、より良い研修施設を目指したいと思います。また今年、病院事業局、中部病院の協力を得て、来年度より当院研修医もハワイ大学関連病院での研修医派遣の選考に加わる事になりました。

6. 県立病院間や琉球大学との交流、コラボレーションは将来沖縄県の人材確保に大変重要です。琉球大学医学生のクラークシップや、初期研修医の受け入れを開始します。
7. ‘病院を出よう’を合い言葉に、今年地域住民の皆様と実際にふれあう医療、地域に根ざした病院を目指し、気軽に相談できる出前講座を開始しました。病院ホームページには自由に選べる多彩な項目があります。一部地域からのスタートですが、今後対象地域や出前講座を拡大する事ができれば、沖縄県全体の健康保健や医療に関する意識の向上に繋がると考えます。

**Q2. 県立病院が病院事業局を中心に、平成21年度から3年間の経営再建計画で積年の課題であった赤字体質を県立病院のスタッフ並びに関係各位のご努力により改善されておりますが、今後の継続的な経営の健全化また公的医療機関としての役割等について、先生のお考えをお聞かせください。**

今年から繰入金がこれまでの85億円から59億円に縮小されました。病院事業局は、過去3年間の再建計画の結果を基に、今後4年間を‘県立病院経営安定化計画’として、1. 経常収支の黒字維持、2. 手元流動性の確保、3. 約70億円の長期債務の返済の3つを目標として取り組む事を発表しました。先日開催された県立病院経営再建検証委員会において、病院事業局から現在の繰入金を維持すると想定した場合、今後10年間、経常収支の黒字化が予想されるとの試算がありました。特に‘持続的な経営健全化が達成される見込みがあるか’については、今年11月の検証委員会で最終的な報告が出る予定ですが、持続的な経常収支の黒字の維持に

は、定数増員や看護師の確保、診療報酬改定、DPCへ実務的な取り組みなど、さらなる県立病院の努力が必要と考えます。近い将来、地方公営企業法全部適応でいくか、地方独立行政法人に移行するのか、最終的な局面を迎える事になりますが、全国の事例から見ても、都市部と、離島医療圏を持つ地域では経営形態に対する考え方が異なります。しかし、沖縄県の選択がいずれの場合になろうとも、公的医療機関のミッションである‘すべての県民に対し、良質な医療を提供する’と言う本質的な医療政策が変わってはならない事は言うまでもありません。

**Q3. 県立南部医療センター・こども医療センターは全国でも数少ないこども病院を併設した総合病院ですが、その特徴と今後どのような医療展開を目指しておられるのかお聞かせください。**

全県を対象とする総合周産期母子センター、こども病院として位置づけられ、小児疾患の最終病院としての役割があります。当院は全国のこども病院と異なり、同一の病院にこどもと成人を対象とした医療を行うユニークな総合病院です。来年度、こころの診療科を再開する事や、今後はadult congenital heart diseaseを代表とする、成人期に達した様々な疾病を、如何に小児部門と成人部門が協力して治療する事ができるか、体制作りや多角的な検討が必要となります。また沖縄県で最初のPICUを開設した事により、小児の重症例の救命率が飛躍的に向上した事は県内外から高く評価されています。厚労省は8床以上のPICUに診療報酬加算を決定し、今後PICUを全国的に展開して行く事を示しました。当院も現在の6床ではベッドが足りず、沖縄全県の重症疾患児に対応する事が困難な状況にあり、現在県に対し、早急にPICUを拡張すべく強力に働きかけています。

**Q4. 県医師会に対するご要望等がございましたらお聞かせ下さい。**

県医師会の多方面にわたる活動には常に敬服

しています。しかし、残念な事に県医師会と公務員医師会との交流が十分でなく、目に見えにくい所がある様に感じます。救急室のコンビニ受診については、特に診療所を主体に診療時間のシフトを検討する事、県立病院が急性期を過ぎた多くの患者様の後方病院を必要としている事、また現在多数の離島の診療所、病院が医師、看護師確保に奔走していますが、今後とも非常時には人的な応援、協力を頂きたいと思えます。

**Q5. 大変ご多忙の身であります、ご趣味等がございましたらお聞かせください。**  
外国を旅行する事が一番の楽しみです。数年

前に妻と一緒にヨーロッパ旅行に行ったのがそのきっかけですが、その時、自分自身の視野の狭さを感じました。同じ地球に住み、他の国の人々の生活や文化を知る事は大変重要です。歴史、市街地を散策した時の色彩や香り、言語、音楽、絵画などの文化と触れ合い、さらに料理やお酒と旅行には楽しい事が一杯です。今年も残り少なくなりましたが、また旅行に行ければ最高です。

この度はお忙しい中、ご回答頂きまして、誠に有難うございました。

インタビューアー 広報委員 金城 正高

